

どのような条件のもとで学生はより学ぶのか



中井 俊樹

名古屋大学高等教育研究センター

学生満足度と

学習成果の向上

本号の特集テーマは「学生の満足度を高める大学づくり」であるが、私からは「どのような条件のもとで学生はより学ぶのか」について話題提供をしたい。学生の満足度というのとは大きなテーマであるが、大学教育に関して直接アプローチするのは私には少し難しいと考えている。

なぜ難しいのかといえば、大学教育は関連するステイクルダーが多いからである。具体的にいうと、学生はもちろん重要なステイクルダーであるが、学生を雇用する産業界もステイクルダーであろうし、政府もステイクルダーと言えなくもない。このようにさまざまなステイクル

ルダーが関わっているが、時々それぞれが相反するものを求めることもある。

例えば、学生からのニーズのみを聞いていると、短期的に役に立つもの、実践的なスキルのみを求めることになってしまうかもしれない。そのようなニーズだけを満足させるような教育というのがはたしてよいのだろうかという問題につながってくる。すぐに役に立つものではなく、十年、二十年先に役に立つものを教えたいと思う者も多いであろうし、きちんと教養を身につけさせてほしいと考えている者もいる。

このように学生満足度だけで大学教育について話すとは誤

解が生じる可能性があるため、今回は学習成果の向上という概念を使いたいと思う。学習成果の向上について話すことで、間接的に学生満足度についての示唆も得られるのではと思う。

話題提供のねらい

私の話題提供のタイトルは、「どのような条件のもとで学生はより学ぶのか」である。この話題提供のねらいは、「学生がより学



なかい・としき●一九七〇年、三重県生まれ●主な著書・論文に中井俊樹「外から見たビジネススクール留学」MBAを考える会『MBAの学び方ービジネススクール留学でどのように力がつくのか』マナハウス、二〇〇五年、

一九七〇～二〇〇五年。中井俊樹「フィリピンー私学依存型高等教育システムの戦略」馬越徹編『アジア・オセアニアの高等教育』玉川大学出版部、二〇〇四年、一七〇～一九一頁。中井俊樹「講義のノウハウを共有しようー名古屋大学版ティーチングティップスの経験」『月刊化学』、五九号、二〇〇四年、四二～四四頁。中井俊樹・山里敬也・中島英博・岡田啓『eラーニングハンドブックーステップでつくるスマートな教材』マナハウス、二〇〇三年。池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部、二〇〇一年。

表1 名古屋大学の研究開発物

<ウェブサイト>

名古屋大学高等教育研究センター『成長するティップス先生ー名古屋大学版ティーチングティップス』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>

名古屋大学高等教育研究センター『ゴーイングシラバス』

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/gs/>

名古屋大学高等教育研究センター『名古屋大学新入生のためのスタディティップス2004』（試作品）

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/>

<書籍>

池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2001）『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部。

中井俊樹・山里敬也・中島英博・岡田啓（2003）『eラーニングハンドブックーステップでつくるスマートな教材』マナハウス。

名古屋大学高等教育研究センター（2004）『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』名古屋大学。

ぶためにどうしたらよいかを考える素材を提供したい」ということである。そのために、私の方から二つの内容に關して情報提供しようと思う。一つは、「どのような条件のもとで学生はより学ぶのか」についての私なりの考えを紹介したい。もう一つは、名古屋大学の経験などから、学生がより学ぶために、どのような働きかけや制度的サポートがあるのか、そしてできるのかを紹介したい。名古屋大学高等教育研究センターでは、表1のように研究開発を通じた授業改善支援をさまざまな形でやっている。これらの経験を踏まえて話したい。

教育現場は複雑空間

教育という現場が非常に複雑な空間であるということは、多くの方もご存知だと思う。教師のちよつとした一言が学生のその後の学習に大きな影響を与えるかもしれないし、授業を通じた学生同士の出会いがその学生たちの一生を変えることもあるかもしれない。同じ教師の働きかけでも学生によっては受け止め方も異なる。化学反応のようにAとBを混ぜれば必ずCができるというようにはいかない。これさえやっておけばという万能薬がなかなかないというのが教育の現場なのではないだろうか。

したがって、ある側面において教育学は気象学に近いよ

うに思われる。天気予報というのは必ずあたるようなものではないが、予測するための方法は考えられている。必ずあたりはしないけれども、どのような要素が天気に関係があるのかは研究されている。

学習成果に

影響を与える要素

どのような要素が学生の学習成果に影響を与えるのだろうか。気象学と同じように教育学者も教授法と学生の学習成果との関係を研究してきた。ここでは、代表的なものとしてフェルドマンの研究成果を紹介する。

フェルドマンは、三十以上にわたる教授法と学習成果との相関に関する実証研究をレビューし、二十八項目の教授法と学生の学習成果との相関係数の平均を算出した。つまり個々の教授法の要素が学習成果にどれほど影響を与えるのかをまとめたのである。その結果の上位十四項目を示したものが表2である。表の右側の数値は相関係数を表し、大きければ大きいほどその教授法が学習成果に影響を及ぼす可能性が高い。

フェルドマンの

研究成果から

読み取れるもの

フェルドマンの研究成果から読み取れるものはいくつかある。たとえば、「教員の準備、コースの設計」が最も学習効果に影響を与えるものであり、学生

表2 教授法と学習成果の関係

教授法	相関係数
教員の準備、コースの設計	.57
説明の明確さと理解しやすさ	.56
授業目標にそった授業	.49
授業で期待される学習成果の理解	.46
教員による知的刺激	.38
学生への高い水準への動機づけ	.38
質問の促進と他の意見への寛大さ	.36
教員への会いやすさと親切さ	.36
教員の話し方のスキル	.35
授業目標と履修要件の明確さ	.35
教員の科目内容の理解度	.34
クラスの水準や進捗への理解	.30
教員の熱意	.27
評価における教員の公正さ	.26

出所：Feldman, K. (1997)

が感じる教員の熱意というのはその半分ぐらいの効果しかないといったことも興味深い結果である。

ここでは、あえて大胆にまとめると学習成果に影響を与える要素は二つのグループに分類できるのではないかということを指摘したい。その二つのグループとは、授業設計と学生参加という二つの概念である。

表2において「教員の準備、コースの設計」、「授業目標にそった授業」、「授業で期待される学習成果の理解」、「授

業目標と履修要件の明確さ」などは授業設計に関連する要素であると言える。つまり、このグループはどのように授業全体を設計するのかという計画段階が重視される要素群である。

一方、授業設計に関連する要素を除いた要素をあえて一つの集合にするならば、どのように学生を巻き込み参加させるかという授業の実施段階における働きかけが重視されるグループになる。「学生に対する高い水準への動機づけ」や「質問の促進と他の意見への寛大さ」などは、学生を授業に巻き込み参加させるための手段として捉えることができる。このように、大学の授業において重要な要素は、大きく分類すると計画段階が重視される授業設計と、実施段階が重視される学生参加に分類される。つまり、大学の授業の成功は、「どのように授業を設計するか」と「学生をどのように参加させるか」という二つの視点が重要であると言える。

話題提供のねらいの時に述べた「どのような条件のもとで学生はより学ぶのか」についての私なりの考えは、次の通りである。大学教育において、授業設計と学生参加の二つが大事で、この要素をおさえておけば、学生の学習成果は向上するのではと考えている。以降、「どのように授業

を設計するか」と「学生をどのように参加させるか」について話していきたい。

なぜ授業の設計なのか

授業を設計すること、つまり授業デザインという概念は、なぜ大事なのだろうか。私はこの理由が少なくとも三つあると思う。

第一に、授業のデザイン力というのは、学生の学習成果や満足度が高い相関があるからである。これは、フェルドマン以外の多くの教育学者の研究成果とも合致している。

第二に、授業のデザイン力は、教員にとって学習が比較的容易だということである。教員は、話し方をうまくしてくださいと言われてもすぐには難しい。また、字をきれいに書くことの苦手な教員が、字をきれいに書くようにと言われても、なかなか上達しないかもしれない。しかし、授業デザイン力というのは、これらのスキルと異なり、比較的習得可能なスキルである。したがって、ファカルティディベロップメントなどにおいても使いやすいという側面がある。

第三に、授業のデザイン力が大学の外から求められているからである。現在、大学評価、単位交換、国際化の流れで、大学はカリキュラムに対応した授業目標の明確化、シラバスの充実化、目標にそった成績評価などの授業デザイ

ンの強化が求められている。要するに、大学外から教育の出口管理をしっかりと行うように求められており、それが授業のデザイン力に関連する。

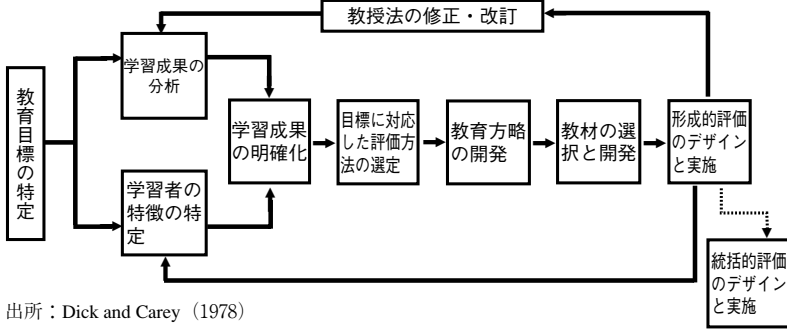
名古屋大学の高等教育研究センターでは、授業デザインの重要性を初期の頃から認識していた。そして、授業をデザインする、具体的にはシラバスをきちんと作ると教育上効果的なのだと学内教員に伝えてきた。実際に、シラバスをつくらずに授業を行うよりも、シラバスをきちんとつくって授業を行うと楽になる部分がある。シラバスをきちんとつくと授業が楽だという感想を述べる教員も少なくなかった。

授業デザインのモデル

授業デザインの背後にある教育モデルとして、インスタラクショナル・デザインというモデルがある。このモデルは、最近eラーニングの文脈でよく用いられるモデルであるが、一九七〇年代に作られたモデルである。具体的には、一九七四年に出版されたガニエとブリッグスによる著書や、一九七八年に出版されたディックとケアリーによる著書に詳しい。

図1はディックとケアリーが開発したモデルである。簡単にまとめると、しっかりと明確な目標を設定して、それ

図1 インストラクショナル・デザインのサイクル



出所：Dick and Carey (1978)

にそってきちんと評価しようということである。そして、中身を教える時は、評価にそったものにしてしようということである。目標にそったムダの少ない筋肉質な授業をしようということになる。

授業デザイン 授業デザイン
 に関する ザイン
 名古屋大学の に関する
 取り組み 古屋大

学もいろいろと試行錯誤してきた。その取り組みについて紹介したい。高等教育研究センターでは、研究開発物として、『成長するティップス先生』、『ゴインングシラバ

ス』、『ラーニングハンドブック』、『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』などを作ってきた。結果として、平成十六年度、文部科学省が進める『特色ある大学教育支援プログラム』の一つとして採択されることになった。その取り組みのタイトルは「教員の自発的な授業改善の促進・支援―授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」である。

成長するティップス先生 『成長するティップス先生』

は、名古屋大学における授業の秘訣やポイントをまとめたものである。これは、高等教育研究センターが一九九八年に設立されてから二年間をかけて開発したものである。二〇〇〇年三月にウェブ上で公開した。「成長する」というコンセプトを大事にしていたため、改訂作業も行ってきた。二〇〇一年十一月と二〇〇四年十二月に大きく改訂したため、現在ではVer.1.2である。その改訂のプロセスは、報告書で公開している。現在では、Ver.2.0に向けて開発中である。

ウェブ版だけでなく、書籍版もある。書籍版は、副題にもあるように「授業デザインのための秘訣集」ということで「授業デザイン」という言葉を前面に打ち出した。玉川大学出版部から二〇〇一年に出版され、二〇〇五年五月

までに第七刷まで増刷されている。

成長するティップス先生
を通して伝えたかったこと

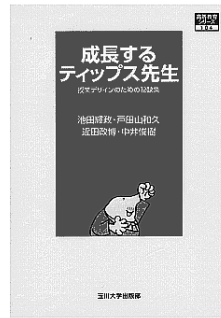
が、全体を通して伝えたかったことは、「授業デザイン
の重要性」に集約される。

具体的には、コースとクラスとはきちんと区別しようという
ことである。学期を通して展開される十五回の授業全
体を通してものをコースと呼ぶ。そして、一回一回の授業
はクラスと呼ぶ。これらをきちんと区別することが大事で
あると伝えた。授業という言葉を使っていると、この二つ
の違いがあいまいになってしまう。この二つの概念を区別
してもらうことで、クラスのデザイン以上にコースのデザ
インが重要であることをメッセージとした。

シラバスについては、本当のシラバスを作ろうというこ
とを提案した。今までシラバスに関しては学生の選択用の
ものと、学生の授業・学習を支援するものがあいまいに
なっていた。それで、学生の授業・学習を支援する本当の
シラバスを作ろうと伝えたのである。

その他にも、私語の問題にしても初回の授業できちんと
説明して学生と約束しようと伝えたり、教材の作成にも事

図2 成長するティップス先生のウェブ版と書籍版



前にきちんとコースパ
ケットのような教材を
作ったほうがいいので
はないかと提案した。
これらも授業デザイン
という考えと関連して
いる。後からになって
対策を考えるのではな
く、きちんとコースの
初めに、授業全体をデ
ザインしましょうとい
うことが言いたかった
のである。

『ティップス先生』
の反響は予想以上のも
のであった。名古屋大
学高等教育研究センターのウェブサイ
トには公開以降、毎
月約二万件のアクセスがある。同様
に書籍版も全教員へ配
布している大学もあるようだ。いろ
いろと意見をいただく
機会もあるが、その多くは肯定的な
ものであった。潜在的
なニーズが高かったと言える。

ゴーイングシラバス 高等教育研究センターでは、『成長するティップス先生』に続く開発物として『ゴーイングシラバス』というシステムを開発した。『成長するティップス先生』において、本当のシラバスを作ろうと提案したが、提案するだけでは簡単にはできないかもしれない。そこで、実際に授業デザインのコンプトをシラバスという形で具体化するツールを作りたかったのである。

名古屋大学の学生にアンケートを取ると、学生はシラバスの充実を望んでおり、シラバスを廃止してほしいとは思っていない。高等教育研究センターでは、『ゴーイングシラバス』というシステムを使って、シラバスを基点とした授業をして、記録をポートフォリオのような形で残してみたらどうかということを提案したのである。

ゴーイングシラバスの機能 『ゴーイングシラバス』にはさまざまな機能がある。

ウェブ上なので、シラバスにそって、教材を載せたり参考文献をアップロードできる。さらに、学生の成果もアップロードすることができる。また、学生も利用できる電子掲示板も用意した。学生の学習を支援するためのシラバスが書けるように、こうやってシラバスを書いてくださいとい

うような入力ガイドも作り、コースウェアという名前でウェブ上で公開している。

図3は、私が担当している授業のページで、毎回の授業の予定を組み、学生に当日の授業までに行うべき学習活動が記されている。『ゴーイングシラバス』によって、シラバスにそって授業ができ、それが記録として残される。また、学生が課題を提出したり意見を述べたりすることのできるページもあり、さまざまな利用方法が考えられる。

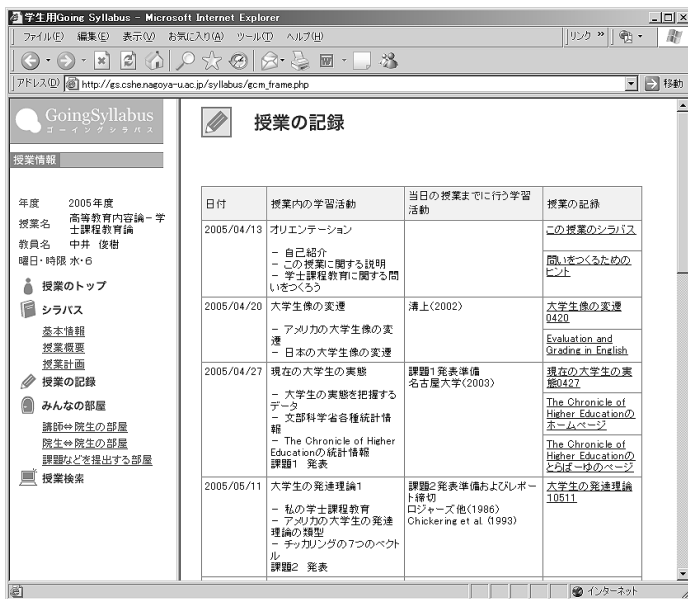
『ゴーイングシラバス』は、いくつかの大学で利用されている。使用した教員や学生の意見などを見ると、『ゴーイングシラバス』は肯定的に評価されている。『ゴーイングシラバス』を利用した授業は、授業アンケートの結果からも、授業時間外の学習時間が長いという結果が出されている。『ゴーイングシラバス』によって、大学教育の一つの課題である授業時間外の学習を促進するということも可能になるのではないかと思う。

新しい教育環境と

新しい学生

新しい教育環境や新しい学生に対応するための授業デザインの開発にも着手してきた。新しい教育環境としてはeラーニングの普及があり、情報通信技術を活用した授業の設計方法が求められている。これまでの高等教育研

図3 ゴーイングシラバスの画面



究センターの研究を踏まえて、『eラーニングハンドブック』も作ることになった。eラーニングは、対面授業と比較するとごまかしがきかないため、事前の準備がより大事になる。多くの教育学者もeラーニングにおける授業デザイン的重要性を指摘している。開発にあたっては、情報通信技術の知識や経験を要するため、名古屋大学情報メディア教育センターと協力して進めた。

新しい学生としては、プロフェッショナルスクールを背景に増加する社会人学生の登場がある。名古屋大学にもいくつかプロフェッショナルスクールがつけられたが、成人学生と従来の伝統的学生の学びは少し違うという意見があった。それで、多様な経験を持った成人学生を対象に、どのように授業を設計したらよいかということについてハンドブックにまとめた。

名古屋大学の
取り組みの効果
トも行っている。「授業デザイン力」を高めるコンセプトの企画もこれまで試みてきた。このような取り組みの効果を明確に表すことは難しいが、授業アンケートの結果からも推察できる。

学生から見ると、シラバスがわかりやすくなったよう

ある。図4に示したように、シラバスがわかりやすくなったと評価する学生の比率は年々上昇している。この結果に伴い、授業全体の満足度などの他の指標でも増加が見られた。おそらく高等教育研究センターが進めてきた活動と少しは関連しているのではないかと考えられる。名古屋大学が授業デザインに対して取り組んできた一連の活動の目に見える成果のひとつなのかもしれない。

学生を大学教育に参加させること

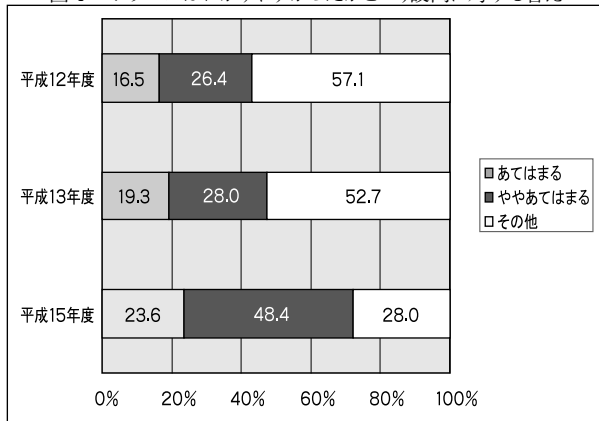
次に、学生がより学ぶためのもう一つの要素である「学生を大学教育に巻き込み参加させる」ということに

ついてお話したい。

学生を大学教育に巻き込み参加させることは、最も重要なことかもしれない。アステインによる、*Students learn more when they are involved.* という言葉があるように、学生の参加は教育の基本である。たとえ授業がうまく設計されていても、学生が学習に参加しなければ学習成果は高まらないだろう。

どのように学生を巻き込み参加させるかという方法は、インスタラクショナル・デザインに代表される授業デザインの手法のような明確なステップにまとめることは難しい。むしろ、いくつかの学習理論や教育理論があって、場

図4 シラバスはわかりやすかったかという設問に対する答え



出所：『名古屋大学における授業アンケート調査報告書』より作成

面に応じて臨機応変に適用することが求められるものである。この領域における名古屋大学の取り組みは開発途上なので、ここではアメリカにおいて開発された学生を巻き込み参加させるための研究開発物について

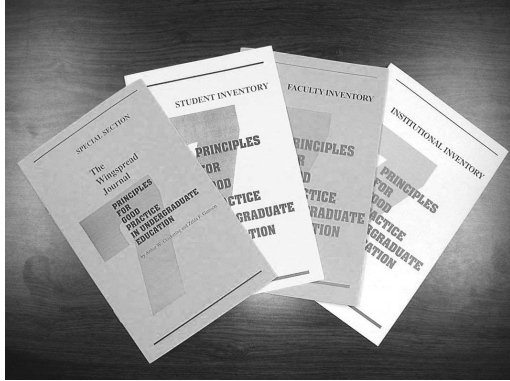
て紹介したい。

優れた授業実践のための七つの原則

ここで紹介したいものは、『優れた授業実践のための七つの原則』(Seven Principles for Good Practice in

Undergraduate Education) 以下、七つの原則)である。『七

図5 優れた授業実践のための7つの原則の小冊子



ト、教員用チェックリスト、大学用チェックリストを含んだ小冊子、の四つの簡素な製本で十数ページにまとめられた小冊子から構成されている。この研究開発物は全米の大学から合計で五十万部以上の注文があったと言われている。ファカルティディベロップメントに活用した大学も多くあると言われている。おそらくアメリカの大学教員の中で最も知られた教授法ではないかと思う。

「七つの原則」は、一九八〇年代後半において米国高等教育学会の研究グループによって開発され、全米をはじめ英国やカナダの大学関係者の間で多く利用されている研究開発物である。この研究開発物は、概要を示した小冊子と、学生用チェックリス

なぜ「七つの原則」は受け入れられたのか

『七つの原則』は学士課程教育における優れた教育実践を行うための原則と具体的な実践手法をまとめたものである。これまでも同様な開発物はあったが、『七つの原則』のように全米の大学に受け入れられたものはなかった。その理由は、『七つの原則』のもつ特徴と関連していると言える。

第一に、学問領域を問わずに使えるということである。

物理学の教員も、語学の教員も使える、というコンセプトで作られたという点である。第二に、教育学に特有な難しい専門用語を使わなかったという点がある。第三に、理念的なものではなく、実践的なものをリストにしたという点である。具体的に何をしたらよいのかについてのリストになっている。第四に、学生と教員と大学の三者の役割を示した点である。教育改善に対して教員の責任は大きいかもしれないが、学生や大学組織にも責任があるという考え方である。第五に、多くの人が覚えやすいように七つの原則に集約したという点である。

『七つの原則』の原則とは

『七つの原則』の原則は表3の通りである。「学生と教員が接する機会を増やす」、「学生間で協力する機会を増や

表3 7つの原則

1. 学生と教員が接する機会を増やす
2. 学生間で協力する機会を増やす
3. 能動的に学習させる手法を使う
4. 素早いフィードバックを与える
5. 学習に要する時間の大切さを強調する
6. 学生に高い期待を伝える
7. 多様な才能と学習方法を尊重する

出所：Chickering and Gamson (1987)

いる。それぞれの原則は、おそらく多くの教員にとって納得のできることであると思われる。実際、学生の学習効果と関連の高い項目である。

『七つの原則』の チェックリスト

これらの七つの原則は、多くの教員に納得されるものかもしれないが、実施することは難しいものである。

そこで、それぞれの原則を達成するためのノウハウがチェックリストとしてまとめられている。

「学生と教員が接する機会を増やす」という原則に対しては、学生がどのようにしたらよいのか、教員がどのようなことをしたらよいのか、そして大学としてはどのような取り組みがあるのかをチェックリストにまとめられている。たとえば、「学生と教員が接する機会を増やす」ためには、学生が「一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会を作ろうとしている」、教員が「将来の進路について学生にアドバイスをする」、大学に「学内に学生と教員が個人的に会って話ができる場所や施設がある」という方法がある。表4は教員用チェックリストの例である。

日本版『七つの原則』

日本でも『七つの原則』のよなものは有効ではないかと私は考えている。日本の教育現場で通用し、適用されるためにはどのような原則やチェックリストが必要なのかを名古屋大学高等教育研究センターでは検討中である。ただ国境を越えるためには、いくつかの修正点はあるのではないかと考えている。日本の大学の制度や組織形態、教員や学生の特性などには十分に配慮する必要があるだろう。もしかすると日本では原則は七つではないのかもしれない。

おそらく近いうちに名古屋大学の現場に適用できるように研究開発物を公開できると思う。お楽しみにしていただ

表4 教員用チェックリストの例

<p>学生と教員が接する機会を増やす</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 将来の進路について学生にアドバイスをする ・ 学生が研究室に遊びにくる ・ 自分の考え方や過去の経験を学生に話す ・ 学生が主催する行事・勉強会などに参加する ・ 学生の課外活動・学外での活動に関する顧問を自発的に引き受ける ・ 授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える ・ 自分と異なる人種・文化・背景の学生の支援に努力する <p>出所：Chickering and Gamson (1987)</p>
--

ければと思う。

学生がより学ぶために
誰が何をすべきか

以上が、名古屋大学や他の大学の経験などから、学生がより学ぶために、どのような働きかけ

や制度的サポートがあるのかを簡単に説明したものである。「どのよ

うな条件のもとで学生はより学ぶのか」についての私なりの考えである「教育目標にそってデザインする」と「学生を大学教育に巻き込み参加させる」という要素は、さまざまなサポートがあることが

示せたのではないだろうか。

では、「どのような条件のもとで」という条件は誰が準備する必要があるのだろうか。これは、学生がより学ぶために誰が責任を持つのかということである。もちろん個々の教員の責任は大きいかもしれないが、教員以外にも責任を持たなければならないさまざまな人がいる。『七つの原則』であげられた大学・学生・教員は主要なアクターと言えよう。

この三者以外にも、文部科学省や外部評価機関等さまざまなアクターが存在すると言えよう。たとえば、外部評価機関の評価を通して、カリキュラムが明確になり、さらに科目間の目標が整合的になる場合もある。したがって、外部評価機関も学生がよく学ぶために貢献はしているとも言える。

学生・教員・大学の トライアングル

さまざまなアクターは存在するが、大学教育に主体的に責任を持つのはやはり教員・学生・大学の三者だろうと思う。学生・教員・大学のトライアングルで大学教育の質の向上に取り組むべきであろう。もちろん、大学と違って、大学の中にはさまざまな組織があり、執行部、学生課、図書館、メディアセンターなど多くの組織が関わ

てくる。

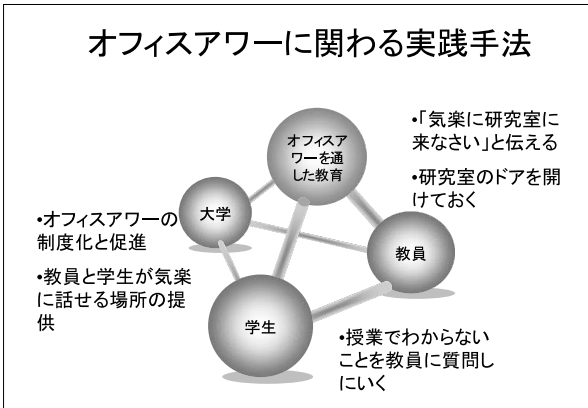
学生・教員・大学のトライアングルがうまく機能するた
めには、同じ目標に対して三者が協力できるのかどうか
にかかっていると思われる。目標の共有ができないと、対立
関係を生むきっかけにもなりかねない。たとえば多くの大
学で導入されている学生による授業評価に関しても、本来
なら大学教育をよくするための仕組みで、学生・教員・大
学ともにメリットの大きいものである。しかし、そのねら
いが明確にされていないと、教員は大学の方から取り締ま
られているのではないかという意識を持つたり、学生と教
員との信頼関係を損なうものになるのかもしれない。

トライアングルの例 一例として、オフィスアワーに関

わる実践手法について取り上げた
い。オフィスアワーは学生の学習効果を高めるために導入
された制度であるが、実際に学生の利用が進んでない場合
が少なくない。オフィスアワーに質問しに行くという行為
は大部分の学生にとってハードルが高いことかもしれな
い。

したがって、オフィスアワーを通じた教育を充実させる
ためには、大学と教員の方でハードルを低くする必要があ
るだろう。たとえば、教員は、授業中に「気楽に研究室に

図6 トライアングルの例



来なさい」と伝えたり、研究室のドアを開けておくことな
どができるであろう。大学は、オフィスアワーを制度化し
たり、教員と学生が気楽に話せる場所を提供したりするこ
とができる。このような協力関係ができたときに、オフィ
スアワーが実質化するのではないかと思う。

同様に「教育
目標にそってデ
ザインする」と
「学生を大学教
育に巻き込み参
加させる」ため
の多くの方法に
おいても学生・
教員・大学の役
割があり、それ
ぞれの協力関係
ができたときに
大学教育の質の
向上につながる
のではないかと
思う。

おわりに

この話題提供のねらいは、「学生がより学ぶためにどうしたらよいかを考える素材を提供したい」ということであつた。いくつかの素材は提供できたのではないかと思うが、さらに詳しく知りたいという方がいれば、名古屋大学高等教育研究センターにアプローチしてほしいと思う。

名古屋大学高等教育研究センターは、一九九八年に創設された。そのミッションは、「国際的な視野のもとに高等教育研究機関の戦略的課題の解決に貢献する」である。そして、中部地区における高等教育研究の拠点を形成するということも目標の一つである。

高等教育研究センターにおいて開発したものは多くの方に使っていただきたいと思う。基本的な出版物以外は無料で提供している。『成長するティップス先生』もウェブで見ることが出来る。『ゴインングシラバス』に関しても、自分たちでサーバを立ち上げてくれる場合には、プログラムを無償で提供している。ジャーナルやニューズレターもすべてウェブ上でダウンロードできるようになっているのに興味のある方はご覧いただきたい。

また、さまざまな高等教育に関するセミナーを開催している。関心のある方はぜひ参加していただきたい。実際に

高等教育研究センターに来ていただければ、高等教育関連の書籍なども閲覧できる。

高等教育マネジメント分野の授業も大学院教育発達科学研究科において開講されている。これは、社会人向けの大学院コースで、学生の多くは近隣の大学の事務職員の方たちである。

名古屋大学高等教育研究センターはオープンドアの姿勢をとっているので、近隣の大学の方たちと大学教育に関する豊かな交流ができればと願っている。

参考文献

戸田山和久編（二〇〇一年）『大学新入生の実態に即した教授技法の開発に関する調査研究』平成十一・十二年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究実績報告書、名古屋大学。

中井俊樹・中島英博（二〇〇五年）「優れた授業実践のための七つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第五号、二八三～二九九頁。

中島英博・中井俊樹（二〇〇五年）「優れた授業実践のための七つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェック

リスト」『大学教育研究ジャーナル』第二号、七一〜八〇頁。

名古屋大学高等教育研究センター（二〇〇一年）『フーイングシラバスの開発 プロジェクト報告書』。

名古屋大学高等教育研究センター（二〇〇二年）『成長するティップス先生』の記録二〇〇一・〇四―二〇〇二・〇三』。

名古屋大学高等教育研究センター（二〇〇五年）『実践的
大学教授法の開発を目指して―「成長するティップス先生」の記録 二〇〇四・〇八―二〇〇五・〇三』特色GP
シリーズ一号。

名古屋大学高等教育研究センター（二〇〇五年）『初年次
オリエンテーションを支援するスタディティップスの開発
と活用に関する事業』平成十六年度学生支援特別経費成果
報告書。

Astin, A. (1984) Student Involvement : A Developmental
Theory for Higher Education. *Journal of College Student
Personnel*, 25' 297-308.

Chickering, A. and Ganson, Z. (1987) "Seven Principles for
Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*,
March 1987, a publication of the American Association of

Higher Education.

Dick, W. and Carey, L. (1978) *The Systematic Design of*

Instruction, Scott, Foresman and Company.

Gagne, R. and Briggs, L. (1974) *Principles of Instructional
Design*, Holt R&W.

Feldman, K. (1997) "Identifying Exemplary Teachers and
Teaching : Evidence from Student Ratings" in Perry, P. and
Smart, J. (Eds.), *Effective Teaching in Higher Education :
Research and Practice*, Agathon Press.

Ganson, Z. "A Brief History of the Seven Principles for Good
Practice in Undergraduate Education", *New Directions for
Teaching and Learning*, No.47, 1991, pp.5-12.